

氏名	籾谷直人		
学位の種類	博士（経済学）		
学位記番号	第3857号		
学位授与年月日	平成12年12月27日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当者		
学位論文名	アジア国際通商秩序と近代日本		
論文審査委員	主査教授	大島真理夫	副主査教授 脇村孝平
	副主査 助教授	長谷川淳一	

### 論文内容の要旨

本論文は、近代日本の産業発展過程におけるアジア通商秩序の存在意義、それとの対抗と依存の関係を、国内外の膨大な資料を駆使して描き出した作品である。ここで言われるアジアの通商秩序とは、華僑や印僑のように国家的な背景を持たない非公式的な経済主体が形成する交易ネットワークと、国家間の通商交渉で決められる貿易枠組の、双方を含んだものを指している。

従来の研究では、幕末開港以降の産業史は、西洋の先進工業国に対しいかにして日本が産業的自立を獲得してきたのかという視点、言い換えれば「近代西洋」対「近代日本」という見地からの研究が支配的であった。この場合、アジアへの視点は、日本の植民地支配、あるいは日本からの製品輸出・アジアからの原料資源輸入という垂直的視点であった。これに対し、著者は、日本の開国は「アジアへの開国」でもあったという視点、つまり「近代アジア」対「近代日本」という水平的な枠組みを提起する。

前編においては、幕末開港から第1次大戦期までの時期を取り上げ、アジア通商網と日本の工業化の関係が検討される。第1・2章では、在来産業である海産物ないし海産加工品の輸出に関して、神戸・大阪や函館に所在した華僑商人とその通商ネットワークの存在とそれに対抗する直輸出の試みが明らかにされた。第3・4章では、近代日本産業を代表する紡績業における原料綿花の調達に関して、華僑商人、インド現地におけるインド人商人の大きな役割とそれに対抗する日本の綿業商社の活動が明らかにされた。近代日本の産業発展は、華僑やインド人商人に担われる通商ネットワークとの対抗の中で実現していったと言えるのである。

後編では、1930-40年代におけるインドや東南アジアにおける日本の通商問題が新しい視角から検討される。従来の研究では、金輸出再禁止後の為替低落による日本綿製品の英印・蘭印への輸出急増は、東南アジア在住華僑の日貨排斥運動や、本国の産業利害・植民地市場確保（ブロック経済化）を重視するイギリスやオランダとの通商摩擦を発生させ、その結果、孤立化した日本は、独自の経済圏建設をめざして満州・華北への侵略、ひいては全面的な戦争への道を歩んだ、という歴史像が描かれていた。これに対し著者は、出身地域による華僑の多様性や、イギリスやオランダは本国への送金という金融利害から、現地通貨の高為替を望み、一次産品輸出と引き替えに日本の綿製品輸入を受け入れていたことを示した。戦争は、そうした「開放性」を可視化できずに、自らのブロック形成を急いだ日本政府の失敗であると論じた。

### 論文審査の結果の要旨

本論文の学術的価値は、大きく4点に分けることが出来るであろう。

第1は、前編において、日本の近代工業化に関して、「西洋からのインパクトに対する日本の対応」という視角ではなく、「アジアへの開国」、「アジアからのインパクトへの日本の対応」という視点を打ち

出したことである。これは極めて斬新なアプローチと言える。海産物貿易における華僑ネットワークからの圧迫と直輸出の試み、初期の原棉輸入における中国商人の支配とインド棉への転換による自立、インド原棉輸入におけるインド人商人への依存と直買い活動、などの事例を通じて、この視角が説得的に展開される。

第2に、後編において、1930年代における、国際通商摩擦と日本の孤立化という通説的歴史像の根本的な転換を図ったことである。著者は、日印会商、日蘭会商に関する経済外交の過程をつぶさにフォローし、英蘭両国において、産業利害（産業製品の植民地への輸出）よりも金融利害（植民地から本国への送金）が重視されたため、植民地側の外貨獲得手段である1次産品輸出が重視され、それとの引き替えに綿製品の輸入が許容されていたことを明らかにした。その際に、華僑、印僑などのアジア商人が日本製品の輸出の担い手として大きな役割をはたしたことを明らかにした。孤立化という通説の見直しは、学界の共通理解となったと言えるであろう。

第3に、本書は、「アジア間貿易論」（杉原薫、浜下武志）や、「ジェントルマン資本主義論」（ケインとホブキンス）など、内外の最新の研究成果を積極的に利用しながら、オリジナルな研究を行っている。学界にインパクトを与え、議論を巻き起こす労作であり、日本経済史とアジア経済史を架橋する、先駆的な研究である。

第4に、著者の史資料への飽くなき探求努力である。国内では、公的な図書館・資料館のみならず、地方の旧家所蔵の個人資料まで博搜し、さらに台湾大学、シンガポール国立大学など、海外にも資料探求の足をのばしている。本書では多数の図表が作成されているが、著者の資料博搜の成果である。

以上の理由により、本論文は、博士学位の授与に値するものと判断する。